

ホロコーストをいかに伝えるか
—アメリカ合衆国ホロコースト博物館のこころみ

大工原 ちなみ

富山大学人文学部紀要第 69 号抜刷

2018年8月

ホロコーストをいかに伝えるか —アメリカ合衆国ホロコースト博物館のこころみ

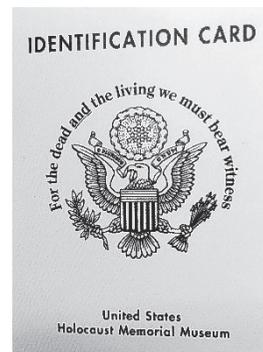
大工原 ちなみ

戦後 70 年以上が過ぎて、ホロコースト¹を直接体験した犠牲者の高齢化が進み、記憶を語る人々がなくなることが危惧されているが、この問題は記憶を様々な方法で継承する試みと、ホロコーストを直接体験しなかった第 2 世代によって着実に受け継がれているように思える。しかしその一方で、ホロコーストの存在そのものを否定するような動きがあることも事実である。James E. Young はその著、*Writing and Rewriting the Holocaust*² の序文の中で、ホロコーストの知識や理解は、「日記という形で犠牲者によって、また記憶という形で生存者によって」伝えられるとしている。さらに彼は、ホロコーストを伝える試みとして、生存者の証言を映像化したり、ホロコースト小説等を書くという行為についても論じている。それはアメリカ合衆国ホロコースト記念博物館が行っている展示の仕方と重なっているようにも思われる。ここでは、ホロコーストをいかに未来も含めて他者に伝えていくのか博物館の事例を中心に考えてみたい。

アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館の展示

アメリカワシントン D.C. にある The United States Holocaust Memorial Museum（以下ホロコースト記念博物館あるいは単に博物館と記す）を訪れた。これまでにアウシュヴィッツ強制収容所やリトアニア、カウナスの杉原千畝記念館等を訪れ、かねてからホロコーストについてどのような形で展示を行い、我々にホロコーストについてとりわけ何を伝えようと意図しているのか興味があったからである。博物館の展示は常設展と特別展から構成されているが、特別展の方は、ユダヤ関係に限定せず、世界中で今も行われている様々な非人道的行為（今回はシリア問題）に焦点が当てられていた。

博物館では、エレベーターに乗ってまず 4 階に案内される。ほの暗いホールからエレベーターに押込まれたとき、思わず貨車に載せられて収容所に送られたユダヤ人のことに思いを馳せずにはいられなかった。日常から異界へと移動するかのようでもあった。その際、一人一人が、一枚の ID カードを取るよう求められる。右の写真³にある女性用のカードを手にとると、それはホロコーストの犠牲となった女性のプロフィールが書かれたもので、館内を巡るときその女性のアイデンティティを持つことになる。そこ



には来館者と犠牲者との一体感を生じさせる仕掛けが準備されているのである。この博物館では「ホロコーストについて学ぶこと」、「ホロコーストの生存者と犠牲者を記憶すること」、「大量虐殺や人種の憎悪、反ユダヤ主義に立ち向かうこと」という3つの柱が掲げられている。これらは相互に関連しあって分かちがたい側面もあるが、この3要素に従って考察を進めていきたい。

1. ホロコーストについて学ぶ

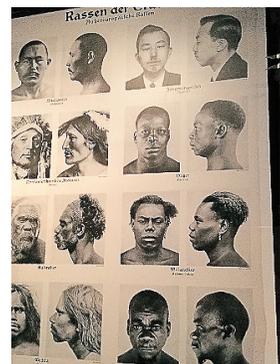


4階に上がり、まず目に飛び込んでくるのが、左の写真である。ホロコースト犠牲者の死体を燃やす場面であるが、あまりにもむごく我々の通常の想像力を超えているため、死体であると気づくのに少々時間がかかったくらいである。なお、この博物館の常設展は子供の入場が認められていない。そのくらい耐えがたい写真や映像が多いのである。ある展示コーナーは、四方を板で覆って

あり、意識して覗きこまないと中が見えないようになっていた。近づいてみると人体実験についての映像が流れており、確かに直視に耐えないものであった。所々でホロコーストに関する映像がモニターで流されているが、音声はない。意識的に音は切られ、絶対的な静けさの中で、ホロコーストの事実を見つめていくことになるのだ。所々に用意された小部屋の中で音声付きの映像をスクリーンで流すコーナーもある。

展示はまずユダヤ人迫害の歴史からスタートする。キリストを売ったユダのイメージから始まり、中世ヨーロッパでユダヤ人迫害の主たる2つの理由となった、儀式殺人の汚名⁴と伝染病を流行させるために井戸に毒を流し込んだといういわれなき誹謗⁵が紹介され、ドレフェス大尉事件、東欧・ロシアで頻発したユダヤ人虐殺事件であるポグロムへと続く。これですでに十分に暗澹たる歴史である。

次はヒトラーの台頭とホロコーストへの道が示される。最初は取るに足りなかったヒトラーが、雇用不安や不景気といった社会不安を背景に勢力を伸ばしていき、民衆が盲目的にそれを支持していく様子が示されている。勢力拡大のための一つの大きな柱がユダヤ人迫害であった。実際には差別対象はユダヤ人だけでなく有色人種や障がい者、キリスト教以外の宗教を信じるものなど広範囲にわたる。右の写真を見てもアフリカ系やネイティブ・アメリカンの例が示されているのみならず、右上の箇所には、のちに日独伊三国同盟を結ぶことになる日本人が例示されているのである。



ナチスの台頭と本格的なホロコーストへの前段階として、ダビ

デの星の形の差別パッチの着用⁶を強要されるなどの嫌がらせを受けるユダヤ人の姿や、ユダヤ人商店のボイコット、ユダヤ関係図書の焚書のコーナーが続く。そして1938年のクリスタルナハト⁷が起こる。ドイツ各地でユダヤ人の教会や商店などが襲撃され、破壊されたガラスが月明かりに照らされて水晶のようにきらめいていたところから名づけられた事件である。



クリスタルナハトの後、シュテットルというユダヤ社会の中で、閉鎖的ではあるが比較的自由に生きていたユダヤ人たちは、やがてゲットー⁸に閉じ込められる。左の写真は規模も最も大きく有名であったワルシャワ・ゲットーの壁である。ゲットーについてはクラコフやウツズなどほかのゲットーの様子も展示されており、中にはゲットーと外界が橋で結ばれている光景もある。中世においてユダヤ人差別の手段として使用されたものが

2つ、ナチスによって復活されているが、一つはこのユダヤ人隔離のためのゲットーであり、もう一つは先ほども出てきたユダヤ人を示す黄色いダビデの星の着用であった。

強制収容所への移送に関する展示の前に、バビ・ヤールのコーナーがある。1941年9月にこの地に侵攻してきたナチス・ドイツによってユダヤ人虐殺が行われた場所であり、虐殺事件そのものを指す。ショスタコーヴィチの交響曲第13番第1楽章⁹でも有名となった。その後ユダヤ人のみならずロマや、ロシア人なども多数殺害されている。この年はホロコーストの歴史においては、ユダヤ民族の抹殺を目的とした「最終的解決」が決定される以前で、この時期にすでに殺害された人数が最終的には10万人を超えたと言われていることから、これから始まるホロコーストの序曲として注目すべき事件である。

次はゲットーから強制収容所への移送である。まずゲットーに駆り集められたユダヤ人は、「最終的解決」を受けて各地に設けられた強制収容所へと送られていく。家畜用の貨車に載せられて何日も水も食料もろくに与えられ



ないまま運ばれ、飢えやのどの渇き、あるいは空気もろくに吸えないために窒息し、輸送途中で多くの人が命を落としたのである。博物館では右上の写真のように一台の貨車が展示してあった。片隅に小さな窓が一つ空いただけの人を運んだとは到底思えないもので、実際に中に入って運ばれた人々に思いを馳せることができるようになっていた。



貨車から無事に生きて降りた人々を待ち受けていたのは、選別であった。SS 将校の指揮棒が右左と振られ、人々の生死が分けられていく。子供や老人、女性の大半が、役に立たないとの理由から生きる権利を奪われた。死を運命づけられた人々は、シャワーを浴びるという名目で、前ページ写真のようなガス室に導かれチクロン B という毒ガスで殺害された。死の苦しみの中、家族や愛する者同士が寄り添うように集まり、固まって亡くなっている様が見受けられる。その後死体は右上の写真のような竈で焼かれた。



一方、選別を生き延びた人々は、強制収容所へ送られる。写真はアウシュヴィッツ強制収容所の入り口に掲げられた、「働けば自由になる」という看板を模したものである。実際にはこの門をくぐったが最後、自由になるどころか、生きてこの門を出られた者はごくわずかであり、下記写真のように、極僅な食料しか与えられず重労働を課され、棒のようにやせ細った拳句、あるいは病に侵されて3か月も立た



ないうちに多くの人がこの世を去ったのである。あまりにも現実が厳しいものであったため、周囲に張り巡らされた電流の通った鉄条網に自ら身を投げて死ぬ者もいた。

アウシュヴィッツ強制収容所で過ごした最初の一夜が余りにもむごいものであったことを端的に記したエリ・ヴィーゼルの『夜』¹⁰の一節がホロコースト博物館の壁に刻まれている。



この夜のことを、私の人生を七重に門をかけた長い夜に変えてしまった
収容所でのこの最初の夜のことを、決して私は忘れないであろう。

この人を焼く煙のことを決して私は忘れないであろう。

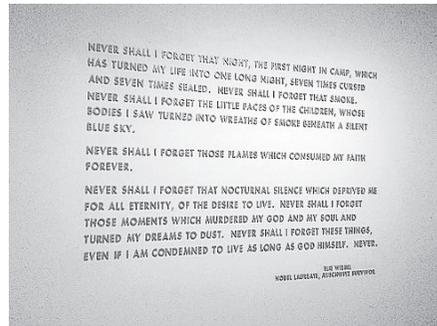
静まり返った青空の下で、亡骸が煙となって立ち昇っていった子供達の
幾つもの小さな顔のことを、決して私は忘れないであろう。

私から永遠に信仰を奪いとったあの炎のことを、決して私は忘れないであろう。

私の神と魂を殺し夢を灰に変えてしまったあの瞬間のことを、決して私は忘れないであろう。
決して。

「決して私は忘れない」というフレーズが5回繰り返され、さらに念押しするように「決して」という言葉でこの詩的な文章は締めくくられている。収容所で過ごした最初の夜、それはすでに母や妹たちを失い、焼かれる子供たちを目にした衝撃的な夜であった。

ホロコーストの歴史に関する展示は、人体実験など収容所内で行われた様々な残虐行為を示した後、様々なレジスタンス活動を紹介し収容所の解放に至るまで続いている。

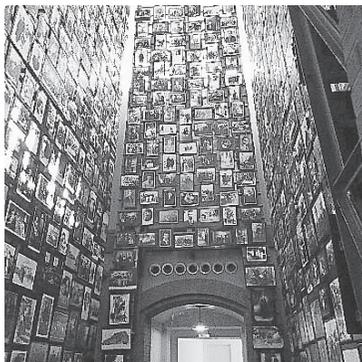


2. ホロコーストの生存者と犠牲者を記憶する

博物館には、Young氏が指摘したような日記、たとえば有名な『アンネの日記』のような日記の展示はほとんどない。しかし、冒頭で紹介した犠牲者たちのIDは、それに代わる犠牲者を記憶するよすがともいえる。モノ言えぬ者たちの展示を行うことで、犠牲者を記憶する試みがいたるところに見られる。IDにはその持ち主の歴史が書かれている。右のIDの子供 Henoch Kornfeld¹¹は1938年にポーランドに生まれている。1943年にベルゼック強制収容所に送られガスで殺害される。その時まだ3歳半であったという。このようなIDが展示に向かうエレベーターホールに山積みされているほか、博物館のWebサイト上でも多数閲覧可能な形で掲載されている。IDの人々の中には、様々な奇跡が重なってナチス占領下から逃亡したり、収容所を生き延びた人もいたが、その多くがガス室等で殺されている。ID一枚一枚を見ることで、その人の生きた証を読み記憶するのである。



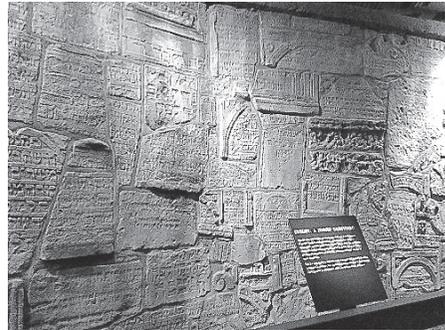
他にも写真を用いた同様の取り組みが行われていて、その一つがユダヤ人居住地区であるシュテットルのコーナーである。左下の写真のように下から吹き抜けの天井の高いところまで、東



欧のユダヤ人居住区に生きていた老若男女の写真が展示されている。その多くはホロコーストで命を奪われた人々の写真であり、膨大な数の写真を展示することで、逆に彼らの不在を示しているのである。幸福そうなカップル、子供たちの写真、あるいは家族の写真。しかし今はないこのような人間の肖像を示すことで、彼らの生命が奪われこの世から喪失したことを効果的に展示する仕組なのである。

ボグロムと呼ばれる東欧・ロシアで頻発したユダヤ人

虐殺とユダヤ人の墓というコーナーもある。ナチスに限らず反ユダヤ主義は顕在化するか、潜在するかの相違はあれ、時代を問わずユダヤ人の歴史の底流を流れている。今でも時折忘れたところに国際面にユダヤ人墓地が荒らされ墓石が倒されたという記事が載るが、これも反ユダヤ主義の表れである。壊されたことによって断片化され一面に積み上げられたユダヤ人の墓でできた壁を見ると、反ユダヤ主義者によって破壊され、本来ある場所から切り離されて、ただのものとして積み上げられた様子は、その主であるユダヤ人の運命と重なって見える。死者の名が刻まれた墓石も記憶の媒体なのである。



もう一つは生存者の証言である。ホロコースト記念博物館では、文章とビデオの双方で触れることができる。ゲッターでの暮らしや移送、ガス室での殺害の様子、強制労働の日々に加えてホロコースト末期に行われた死の行進や収容所解放の様子、戦後の裁判に至るまで、多岐にわたっている。時に涙ぐんで語れなくなる生の声を聴くことで、生存者の苦悩の歴史を記憶するのである。なお、生存者の証言は、博物館の Web サイトにも掲載されている。次の Fritzie Weiss Fritzshall による証言はそのうちの一つである。彼女はアウシュヴィッツ強制収容で行われた選別について、下記のようにビデオ映像で証言している。¹²

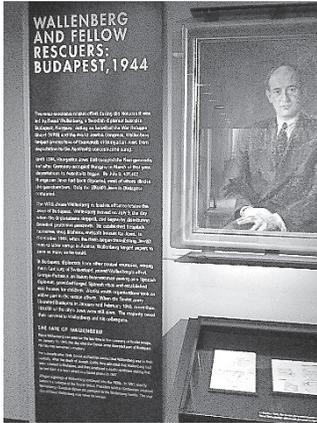
We needed to show that we still had strength left, to, whether it was to work or to live another day.

I recall some women, um, were beginning as their hair grows back, they were beginning to get gray hair, and they would go and take a little piece of coal from one of the pot-bellied stoves that was in a barrack. And they would use this coal to color their hair with so that they would look a, a little younger. I mean one grayed at the age of maybe eighteen or nineteen under those conditions. And they would run...we would run in front of whoever it was that was doing the selections to show that we could survive one other day. If one had a scar, a pimple, if one didn't run fast enough, if one didn't look right for whatever reason to the particular person that was doing the selection--they would stand there with a stick, to the right or to the left, as you ran by them. One never knew if they were in the good line or the bad line. One line would go to the gas chambers, the other line would go back to the camp and to the barracks to live another day.

選別を生き残るためにはまだ働けることを証明するの必要があり、そのために白髪が混じり始めた女性は石炭の粉で髪を黒く染めて必死に若く見せた。また選別が行われる場所では、できるだけ早く走る必要があった。選別の結果左右に分けられるが、どちらが生みの道で、どちらがガス室への道であるのか分らず震える思いでいた収容者の心情が証言されている。ビデオなので、語り口まで直に感じることができ、強い印象を残す。

3. 大量虐殺や人種的憎悪、反ユダヤ主義に立ち向かう

A. 反ユダヤ主義に立ち向かった人々



博物館には、“Wallenberg and Fellow Rescuers: Budapest, 1944”というコーナーがあり、ユダヤ人迫害に立ち向かった人々が紹介されている。タイトルとなっている Raoul Gustaf Wallenberg (1912～47?) は、スウェーデンの実業家で、特別に付与された外交特権を最大限利用することで、ナチス侵攻下のハンガリーで10万人ものユダヤ人を救出した。しかしその後進駐してきたソ連軍に拉致され殺害されたとみられている。ユダヤ人の窮状を知り危険を承知で、ユダヤ人の救出のためにハンガリーに赴いた彼は、実際命の危機にさらされることも多々あったという。彼の生命を奪ったのが、ナチスではなくソ連であったことは皮肉でもある。ホロコースト記念博物館には至る所で生存者の証言を聞けるコーナーがある。Wallenberg 氏の功績についても多くの証言がある。その一つである Agnes Mandl Adachi (1918, Budapest, Hungary 生) が1990年に行った証言¹³は下記のとおりである。

Raoul went after these people all the way to the Austrian border. But one of these occasion he had Per Anger with him too, and he had a big black book. And on the way to the railway station he stopped and screamed at the Nazis, in German, he spoke perfect German, "How dare you are taking our people, they all are protected people," and "All of those people who have my papers turn around." And there was one of my very good girlfriends from here now, she said well what can happen they kill her anyhow. She turned around. She didn't have any paper, and her sister and her mother. And then, "Get on the truck." Okay. And then he started to open his black book and started to read names like a machine gun. The people caught on, those who could still walk, and they walked up, whether that was their name or not. And he brought them, a thousand people, back to Budapest, to the safe houses. And on the way home, Per Anger said to him, "Raoul, I didn't know we have a black book and you have names. When did you do that?" And Raoul start hysterically laughing, he says, "I show it to you when I've done it," and he opens it up and not one single name. Nothing. But that was his idea. He had to do something. He had to save people. And the same thing, he had drivers' licenses, and, and, and insurance papers, whatever he could find in Hungarian that the Germans couldn't read. And he took it all away to the train and he demanded to open the doors and yell to the people "I have your papers here, get out Mr. so-and-so." And that to some people, you know [gave them the idea] "Oh, maybe we can get away." And, and he handed them...some of them got the Schutzpass [protective pass] not with their name but who cares, you know, and insurance papers and tax papers, you name it. And he brought them back.

Wallenberg 氏がハンガリーから移送されるユダヤ人をオーストリア国境まで追いかけて、架空の保護証明書を振りかざすという機知と外交特権を行使することで、多数のユダヤ人を救った様が如実に語られている。

自らの危険を顧みずユダヤ人の救出にあたった人々は他にも

多数存在した。日本の外交官

であった左の写真の杉原千畝¹⁴

やスピルバーグ監督の『シンドラー

のリスト』で有名になった

右上の写真のオスカー・シンドラーら、多くの義人たちが写真入りで紹介されているコーナーがある。彼らの多くがのちにイスラエル政府から、「諸国民の中の正義の人」として表彰されている。



Chiune Sugihara (1900–1986)

Sugihara, Japanese Imperial Consul in Kaunas (Kovno), Lithuania, from late 1939 to September 1940, was deeply moved by the plight of Jewish refugees who had fled to Lithuania after the German and Soviet invasions of Poland. When Soviet forces occupied Lithuania in June 1940, Sugihara on his own initiative issued more than 2,000 visas to Jews and non-Jews, helping them to cross the Soviet Union to Japan. From there, some made their way to the United States, the British dominions of Australia and Canada, and other destinations. Many others were transferred to Shanghai, China.

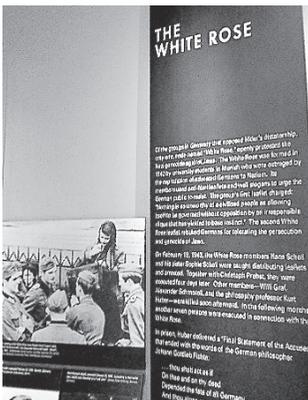


記念館では杉原千畝氏についての特別展¹⁵を過去に開催し、東欧のユダヤ人たちが、オランダ領キュラソーのビザと杉原氏が発行した日本の通過ビザによって、上海等へ逃亡し生き残ることができた功績について展示している。

これとは別にナチス・ドイツ下でユダヤ人迫害に反対してレジスタンス活動を行ったドイツ人を紹介するコーナーがある。「白バラ抵抗運動」を中心とするコーナーである。白バラはミュンヘン大学の学生であった、ハンス・ショルとその

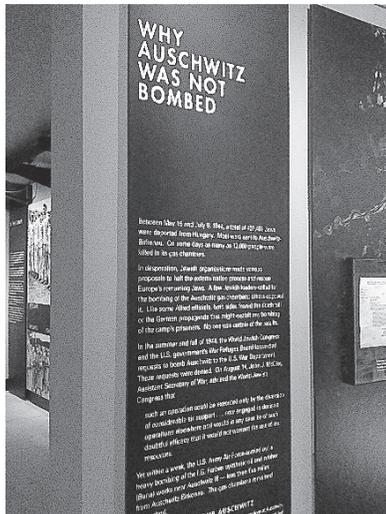
妹ゾフィー・ショルを中心に学生や教員から構成され、非暴力主義に基づき反ナチスを訴える6種類のビラを作成したが、見つかりゲシュタポに引き渡され、彼らの多くが死刑判決を受け処刑された。

マルク・ローテムント 監督による『白バラの祈り ゴッティ・ショル、最期の日々』(2005年)などこれに関連する映画や本も多数出版されている。同じドイツ人といってもナチス政権下のドイツでも自らの信念に基づき、ナチス・ドイツという絶対的な権力に抗い、傍観者の立場から一歩踏み出し抵抗活動をした人々がいたことを示している。



B. なぜアウシュヴィッツ強制収容所は爆撃されなかったのか？

アウシュヴィッツの事実が展示された後に、“Why Auschwitz Was Not Bombed?”というコーナーがある。ホロコースト記念博物館の開館に深くかかわり、自らもホロコースト体験者であり、実体験に基づくホロコースト文学を多数執筆し、1986年にノーベル平和賞も受賞した、エリ・ヴィーゼルの、博物館の開館時の挨拶で次のように述べている。



“Mr. President and distinguished guests,” said Wiesel, “these names were known to officials in Washington, and London, and Moscow, and Stockholm, and Geneva, and the Vatican. After all, by April 1943, nearly four million Jews from the countries surrounding Hungary had already vanished... The Pentagon knew; the State Department knew; the White House knew; most governments knew.” And Wiesel recited an anguished litany of questions. Why were Hungarian Jews not warned? Why were the railways to Auschwitz-Birkenau not bombed? Why was there no public outcry? Why were fighters in the Warsaw ghetto and other ghetto not aided, not even encouraged?¹⁶

なぜ連合国はアウシュヴィッツの存在を知りながら、爆撃をしなかったのか？大勢のユダヤ人たちが強制収容所へ移送され、ガスで殺され焼かれている事実を知りながらなぜ世界は沈黙し続けたのか？この問題はエリ・ヴィーゼルのみならず、ホロコースト後繰り返し問いかげられた問題である。彼自身、「答えは示せないし、答えはない」とも述べている。その後彼は、時のクリントン大統領に向けて、ユーゴスラビアで目にしたこと、つまり大勢が殺し合い多くの子供たちが亡くなっている惨状を目にしたために夜も眠れないと訴えかけ、「我々は血の殺戮を止めさせるために何かすべきだ」と訴えかける。これはホロコースト記念博物館の基本的コンセプトでもある。ホロコーストについて歴史的事実を示し記憶し反ユダヤ主義に抗うのだが、その対象はホロコーストやユダヤに留まらないのである。過去にはユーゴスラビアの惨状に目を向け、現在ではシリアなど中東での非人道行為に目を向けて特別展を開催して世界に訴えかけるのである。

ホロコーストではしばしば傍観者の問題がクローズアップされる。たとえナチスの構成員のように直接手を貸さなかったとしても、残虐行為に目をつぶり沈黙を通していたとすれば、それは罪であるという考え方である。ヴィーゼルと同じくホロコースト体験者であり、数々のホロコースト文学を書き残したプリモ・レヴィは『これが人間か』（邦題『アウシュヴィッツは

終わらない』)のプロローグ¹⁷で次のように語りかけている。

暖かな家で
何事もなく生きている君たちよ
家に帰れば
熱い食事と友人の顔が見られるきみたちよ

これが人間か、考えてほしい
泥にまみれて働き
平和を知らず
パンのかけらを争い
他人がうなずくだけで死に追いやられるものが。
これが女か、考えてほしい
髪は刈られ、名はなく
全てを忘れ
目は虚ろ、体の芯は
冬の蛙のように冷えきっているものが。

考えてほしい、こうした事実があったことを。
これは命令だ。
心に刻んでほしい
家にいても、外に出ている
目覚めていても、寝ている。
そして子供たちに話してやってほしい。

さもなくば、家は壊れ
病が体を麻痺させ
子供たちは顔をそむけるだろう。

プリモ・レヴィは、私たちに向かって単なる傍観者であってはならず、ホロコースト犠牲者の実態を知り、それにとどまることなく事実を「心に刻」み、「子供たちに話す」ことを私たちに命じている。

繰り返し述べているようにホロコースト博物館は、“Learn about the Holocaust” “Remember

Survivors and Victims” “Confront Genocide/Hate and Antisemitism” の3つを基本方針として掲げている。まず、ホロコーストの歴史的事実を正しく理解し、そのうえでホロコーストの犠牲者に思いを馳せ、差別や憎悪に立ち向かうことを来館者に求めているのである。夥しい展示が史的事実を伝え、そこにある人々の写真の一枚一枚が、入り口で任意に一枚ずつ手にとる犠牲者の ID カードとともに犠牲者に思いを馳せる仕掛けとなる。しかし、共感だけでは不十分で、単なる傍観者にとどまらず、大量虐殺や反ユダヤ主義といった不正義に向かって、共に立ち向かうことを求めているのである。

エリ・ヴィーゼルも、もし人々が傍観者に終わらず、ホロコーストという不正に向けて声を上げて立ち上がっていたら、アウシュヴィッツは早くに爆破され、600万ものユダヤ人の生命が奪われることはなかったと言いたいのであろう。

先に引用したホロコースト博物館の壁に掲げられたエリ・ヴィーゼルの Night の一節では「決して私は忘れない」というフレーズが5回繰り返され、それを念押しするように「決して」という言葉でこの詩的な文は締めくくられている。収容所で過ごした最初の夜、それはすでに母や妹たちを失い、焼かれる子供たちを目にした衝撃的な夜であった。文としては、「私」が主語になっており、主人公の決して忘れないという決意を秘めた思いが吐露されている形になっている。しかし、これはややもすれば傍観者を決め込む我々に向けた、プリモ・レヴィ流に言えば命令なのではないだろうか。一人の少年の身に起きたこと、少年にここまでの思いを抱かせた恐ろしいホロコーストの事実を私たちは決して忘れてはならないのである。決して。

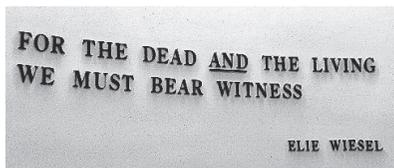
エリ・ヴィーゼルの演説と呼応するかのように博物館の展示の終わり近くに、「アメリカ人に向けて」というコーナーがある。ここでも音声は流されず、ブースに電話機が置かれ受話機を耳に当てて選択した音声を聞く仕組になっている。どのメッセージもアメリカ人が傍観者に留まらず、行動に移していたら事態は変わった可能性があることを示唆している。ある意味、アメリカ人に向けての無言の咎めだてが行われているのである。対象はアメリカ人という形式は取っているが、それは直接手は下さなかったものの傍観者でしかなかった他国の人々、そして現在ホロコースト博物館の展示を見て、悲惨な展示に心を動かされたもののそれで終わってしまう大多数の人々に向けられたメッセージでもあるともいえよう。プリモ・レヴィのメッセージ同様、博物館で展示を目にした人々は、それを心に刻み、家族や友人など人々に伝え、傍観者に留まらず一歩前に踏み出すことを求められているのだ。

現在ホロコースト記念博物館の最大の関心事は、ホロコーストの存在を否定する動きがあることへの懸念に向けられているようである。

Key denial assertions are that the murder of approximately six million Jews during World War II never occurred, that the Nazis had no official policy or intention to exterminate the Jews, and that the poison gas chambers in Auschwitz-Birkenau death camp never existed. Common distortions include, for example,

assertions that the figure of six million Jewish deaths is an exaggeration and that the diary of Anne Frank is a forgery.¹⁸

上記にあるように、第二次世界大戦中にナチスの明確な意図によって600万人のユダヤ人が殺害されたこと、アウシュヴィッツ・ビルケナウに強制収容所やガス室は存在しなかったこと、さらにはアンネの日記は捏造であるといった類のことである。博物館は、ホロコーストを否定する共和党の政治家がイリノイ州の議員候補に名前が挙がってきたことを受けて、今年3月21日に“Museum Urges Vigilance against Holocaust Denial and Antisemitism as Denier Emerges as Nominee”と題する緊急声明¹⁹を出して警戒している。また、3月27日にフランスでホロコーストの生き残りであるユダヤ人女性が殺害されたことに関しても同様に声明を出している。²⁰ 反ユダヤ主義への戦い、広い意味での人種差別や非人道的行為への闘いは休む暇もないのである。

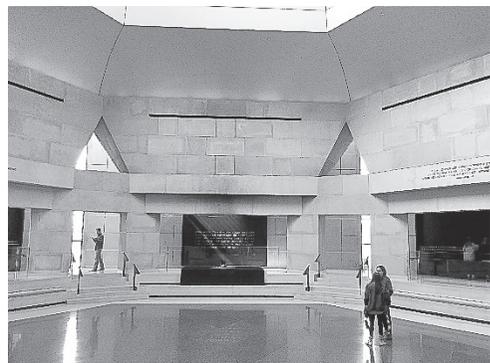


4. 祈り

展示は、エリ・ヴィーゼルの「死せる者と生ける者のために私たちは証言しなければならない」という句で締めくくられ、最後は“Hall of Remembrance”という祈りの場が用意されている。

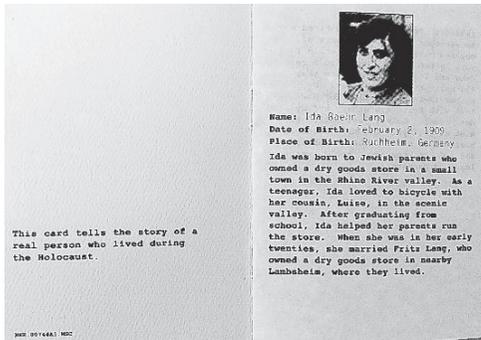
ユダヤ人の犠牲が多かった各地のコーナーがあり、そこでキャンドルに火をともし祈りを捧げることができる。アウシュヴィッツやトレブリンカ、ダッハウ、マイダネクのような強制収容所だけでなくユダヤ人の犠牲者が多かった地名が並んでいる。中央の碑には次のように刻まれている。

Only guard yourself and guard your soul
Carefully, lest you forget the things your
Eyes saw, and lest these things depart
Your heart all the days of your life. And you
Shall make them known to your children,
And to your children's children



碑文は私たちにここで見たことを記憶し生涯心にとどめるだけでなく、子供たちやその子供たちにも知らせていく決意を私たちに促している。

さてここで、入館するとき手に取ったIDカードに再び目を向けてみたい。博物館巡りの間、



自身のIDともなったカードである。そこには彼女の命運が書き記されている。内容を要約すると彼女の名前は、Ida Baehr Lan といひ、1909年にドイツで小売商のもとに生まれ、20代の初めに乾物を商う Fritz Lang と結婚し、Freya という娘を授かる。ナチスの台頭を受けて義母は別の息子連れてニューヨークへ移住するが、Fritz は商売を諦められずドイツに残る。やがて一家はフランスの

収容所へ送られるが、娘は現地の人々によって収容所から救出されて匿われる。「私は有刺鉄線越しに Freya にさよならを言う」というところで記述は終わり、最終ページには、彼女がその数日後アウシュヴィッツに送られそこで亡くなったことや、Freya は生き延びて戦後、父と再会できたことが記されている。ちなみにこのカードナンバーは、# 4653 である。この事実を知るとき、なぜ義母とともにアメリカに逃げなかったのかという無念さがこみ上げてくる。膨大な数のカードの中から任意で取り上げたホロコーストで亡くなった犠牲者一人一人の ID と共に記念館を歩き様々な証言を聞くことで、犠牲者と一体化し、彼らに祈りを捧げ、最後にホロコースト記念博物館で見聞きしたことを身近な人や子供たちに伝えていくという強い思いが生じてくるのである。ホロコース記念博物館が目指すものはそこにあると言えよう。

注

- 1) ホロコーストは今ではナチスによるユダヤ人大量虐殺を示す言葉であるが、元来ユダヤ教では、燔祭の際に神前に供える獣の丸焼きを意味していた。ユダヤ人たちは各国からいくつかの強制収容所へとかり集められ、そこで銃やガスで殺され、火に焼かれて煙と化して神のみもとに昇っていったわけであるが、燔祭の捧げものが、獣ならぬ生身のユダヤ人であった点にこの事件の恐ろしさはあったといえよう。
- 2) James E. Young, *Writing and Rewriting Holocaust: Narrative and the Consequences of Interpretation* Indianapolis: Indiana UP, 1988. Preface
- 3) アメリカホロコースト記念博物館にて筆者撮影。今後特に断りのない写真は同様のものとする。
- 4) エジプトで奴隷状態に置かれていたユダヤ人達をモーセが導き出したことを記念するユダヤ教の過越祭が春先にある。大急ぎでエジプトから脱出したので、イーストでパン種を発酵させる時間もなかったことを記憶するために、過越祭ではイーストを入れない種無しパンを焼くが、そのためにキリスト教徒の子供を殺しその血を使ったという誹謗が儀式殺人の汚名である。パンは古くなると青だけでなく赤いカビも生じることから血が連想されたようである。
- 5) 中世のヨーロッパで、最も恐れられていたのは、ペスト等の伝染病であったが、そのペストを故意に流行させるためにユダヤ人が井戸に毒を投げ込んだという根も葉もない誹謗。当時はペストの正体がわからなかったため民衆の不安を駆り立てた。現在ウィーンを始めヨーロッパの歴史ある都市に行くところの中央にペスト記念柱が立っていることから、当時の人々のペストに対する恐怖が伝わってくる。その恐怖心から生じた憎悪や不満の矛先をかわす為、その時々々の権力者達は、伝染病の原因をユダヤ人

が毒を井戸に投げ込んだためとした。

- 6) 1215年の第4回ラテラン公会議でユダヤ人は黄色いダビデの星を身につけることを強制される。
- 7) 1938年には、クリスタルナハト（水晶の夜）事件が起きる。当時ドイツ政府からもポーランド政府からも受け入れを拒否されたユダヤ人たちは、国境の無人地で家も食料も無い悲惨な状態で放浪することとなり、餓死者も大勢出る有様だった。ドイツ政府の非人道的な政策により、両親がこのような状態におかれたことに憤慨したユダヤ人青年が、パリでドイツ大使館員を殺害する事件をおこす。これに対する復讐としてユダヤ人の住宅や商店、ユダヤ教会などが次々と襲撃され放火された。警察等も積極的に荷担したと言われている。これを受けて翌1939年初頭までに、ユダヤ人口の半分が出国した。しかしオランダへ逃げたアンネ・フランク一家のように再び占領下に置かれたケースもあった。
- 8) 1179年の第3回ラテラン公会議によってユダヤ人がキリスト教徒を雇うことや一緒に住むことが禁止された。実際にゲットーの形をとるのは、16世紀初頭のヴェネチアで、現在でもヴェネチアやワルシャワ、プラハなど世界各地にゲットーの跡が残っている。ゲットーとはユダヤ人居住地区のことで町の片隅につくられることが多く、非常に狭い空間に多くのユダヤ人たちが押し込められ、外界と遮断された中で生きていた。この中では当然のことながら栄養や衛生状態も悪くユダヤ人たちは貧弱な体型になったと言われている。ただユダヤ人のみの共同体であったので、皮肉なことに異教徒からは守られ、ユダヤ文化の継承には役だったとする見方もある。
- 9) Kondorashin, Kirill, Cond. Symphony No.13, op.113 "Babi Yal". By Dmitri Shostakovich. Philips, 1980. ショスタコーヴィチ自身はユダヤ人ではないが、第一楽章ではバビ・ヤールで亡くなったユダヤ人と一体化するかのようになり、「バビ・ヤールに記念碑はない。切り立つ崖が粗末な墓標だ。私は恐ろしい。今日私は年老いているのだ、あのユダヤ民族と同じように」という合唱で始められる。ポグロムのイメージが歌われ、アンネ・フランクと自己同一化した後、「バビ・ヤールに雑草がうなり、(中略)そしてこの私は、無音の叫びの塊として数万の集団虐殺(ポグロム)された者たちの上にいる。私はここで銃殺された老人だ。私はここで銃殺された子供だ。私の中のなにもものも、それを忘れはしない。」というポグロムを記憶し伝える覚悟で終えている。訳は同CDのウサミ・ナオキによる。
- 10) Wiesel, Elie. Trans Marion Elie. *Night*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1958. p.34. 訳は筆者による。
- 11) United States Holocaust Memorial Museum "ID Card Henoch Kornfeld" Holocaust Encyclopedia <https://www.ushmm.org/wlc/en/idcard.php?ModuleId=10006268> Accessed on April 18, 2018. (以下アクセスは同日のものとする)
- 12) United States Holocaust Memorial Museum. "Browse all Oral Histories--Fritzie Weiss Fritzhall Describes selection process in Auschwitz [Interview: 1990]" https://www.ushmm.org/wlc/en/media_oi.php?ModuleId=0&MediaId=1129
- 13) United States Holocaust Memorial Museum. "Browse all Oral Histories--Agnes Mandl Adachi Describes Raoul Wallenberg's efforts to save Jews from deportation [Interview: 1990]" Holocaust Encyclopedia. https://www.ushmm.org/wlc/en/media_oi.php?ModuleId=0&MediaId=1076
- 14) 杉原千畝記念館（リトアニア）についての補足
リトアニアのカウナスに杉原千畝氏が勤務していた領事館が記念館として保存されている。杉原氏は、6千人ものユダヤ人の生命を救ったとされ、リトアニアでは今でもなお小学生でも知っている有名人であるそうだが、日本では、政府の意向に反して無許可で通過ビザを発行したとして、外務省を解雇されている。次ページの写真（筆者撮影。以下の写真も同じ）は杉原千畝の執務室のものであり、ビザを発給したユダヤ人の名簿もある。館内では杉原氏を紹介する15分程度のビデオも流される。

ホロコーストをいかに伝えるか—アメリカ合衆国ホロコースト博物館のこころみ



建物は 2017 年 9 月現在修復中であったが、建物の外には 1939 年から 40 年にかけてここに日本の領事館が置かれ、ユダヤ人の救世主となった杉原千畝が、ここで働いていたことを示す石板と、文字通りここが、「希望の門、命のビザ」であったことを示すプレートが柱に設置されている。



また、リトアニアの首都ヴィリユススの公園に杉原氏の功績を称える石のモニュメントが設置されている。左は、モニュメント右側の中ほどにあるビザを拡大したものである。



ただ、杉原記念館では杉原氏の業績や偉大さは伝わってくるが、多くの見学者は、ホロコースト博物館とは異なり、訪問者は最終的には傍観者に留まるであろう。

- 15) United States Holocaust Memorial Museum. “日本語のリソース”
<https://www.ushmm.org/ja/flight-and-rescue>
- 16) Berenbaum Michael. *The World Must Know*. United States Holocaust Memorial Museum, p.xix.
- 17) プリモ・レヴィ、竹山博英訳、『アウシュヴィッツは終わらない』朝日選書、1980。プロローグ。
- 18) United States Holocaust Memorial Museum. “Confront Hate and Antisemitism” Holocaust Denial

and Distortion

<https://www.ushmm.org/confront-antisemitism/holocaust-denial-and-distortion>

19) United States Holocaust Memorial Museum. “Press Release”

<https://www.ushmm.org/information/press/press-releases/museum-urges-vigilance-against-holocaust-denial-and-antisemitism-as-denier>

20) United States Holocaust Memorial Museum. “Press Release”

<https://www.ushmm.org/information/press/press-releases/museum-statement-on-murder-of-holocaust-survivor-in-france>